

國學院大學學術情報リポジトリ

2023年度国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか--ツーリズムと宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC8:161.3, NDC8:689 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001633

共生の物語をつむぎなおす —ポーランドに出現した 2.5 次元のユダヤ人街—

加藤 久子
(大和大学社会学部 教授)

ポーランド南部にクラクフという都市がある。1596 年まで王座が置かれたヴァヴェル城や、カトリック教会がひしめきあうように建ち並ぶ旧市街【図 1】は 1978 年にユネスコ世界遺産に登録されており、1989 年の東欧の民主化、2004 年の EU 加盟を経て、国際観光客にも人気の観光都市となっている。またクラクフは、第 264 代教皇ヨハネ・パウロ 2 世ゆかりの地でもある。教皇の出生地はクラクフ近郊の小都市ヴァド



図 1 旧市街広場。写真中央は聖マリア教会
(筆者撮影、2014 年)

ヴィツェであるが、大学進学以来、かなりの年月をクラクフで過ごし、教皇に選出された際にはクラクフ大司教を務めていた。ポーランドでは、「教会離れ」が進んでいるとされる今日のヨーロッパでは異例の水準の高い教会出席率がみられるが、クラクフを中心とする南部の都市では、特に実践的な信仰形態をみることができる。クラクフは、いわば「カトリックの都」と言ってよいだろう。

1. カトリックの都のユダヤ人街 —カジミエシュ小史

このクラクフという都市の中に「ユダヤ人街」と呼ばれる地区がある。それがカジミエシュである。クラクフとカジミエシュは、今は地続きで徒歩でも移動可能であるが、中世には川を挟んだ北側と南側に位置する「双子の都市」であった【図 2】。現在のカジミエシュは、ユダヤ文化を見学、体験できる「エキゾチックな」観光地として賑わいを見せる。レム・シナゴグの周辺には 19 世紀風の看板がかかる小商店が立ち並び、壮麗なテンペル・シナゴグでは世界的に著名なユダヤ系音楽家のコンサー

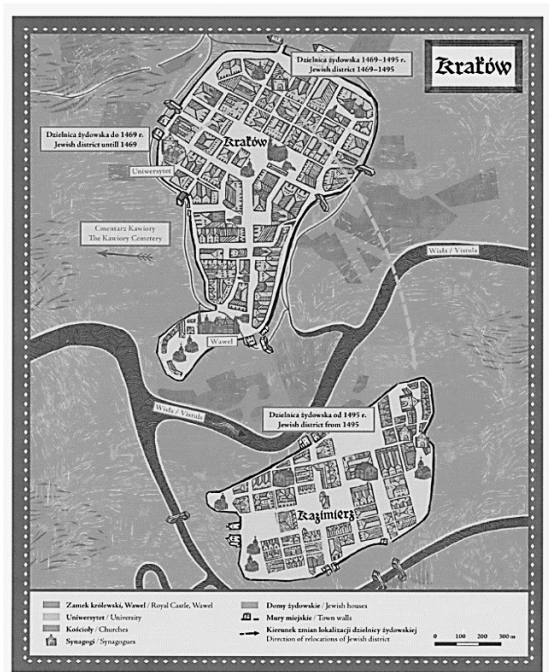


図2 中世のクラクフ（北）とカジミエシュ（南）
POLIN : 1000 Year History of Polish
Jews, p.78

人が知るところであろう。追放されたユダヤ人の多くは徒歩で周辺地域に逃れ、あるいは船に乗って地中海沿岸の商業都市に拠点を築き、やがて河川を遡上し、ローマ帝国全土の大都市に居住地を拡大していった。4世紀にキリスト教がローマ帝国の国教と定められた後にも、数百年の間、民衆レベルではキリスト教とユダヤ教は未分化の状態であり、相互に祭りの祝宴や婚礼などに招待し合い、雇用関係や通婚なども見られたと言われている（ポリアコフ、2004）。しかし、8世紀頃から始まったイベリア半島に侵出してきたイスラム教徒との戦い（国土回復運動）や、11世紀末にローマ教皇によって呼びかけられ、その後200年もの間続いたエルサレム遠征（十字軍運動）などにより、様相は一変する。キリスト教徒の一体感が謳われるのと同時に、異教徒に対する武力行使や略奪は当然視される風潮の中で、ユダヤ教徒はヨーロッパの「内なる敵」とされるようになり（ポリアコフ、前掲書）、ヨーロッパ各地でユダヤ教徒に対する襲撃事件が起きるようになる。治安悪化を恐れた各地の統治者は自らの統治する領土からの「ユダヤ人（ユダヤ教徒）追放令」を出し、西欧各地でユダヤ人は追放（イベリア半島などではキリスト教への改宗も認められた）を強いられることとなった。

これらのユダヤ人を誘致したのがポーランドなど東欧各地の王であった。特にポー

トが開かれている。スタラ・シナゴーク前の広場にはユダヤ料理のレストラン（プティックホテル）が軒を連ね、夜にはクレズマー音楽の生演奏が鳴り響く。この広場では、毎年6月にユダヤ・フェスティバルの終幕コンサートが開催されるのが通例となっており、ハシッド（敬虔派）の輪踊りの熱狂に観光客も身をゆだねる。

しかし、なぜこの東欧の地に「ユダヤ人街」が存在しているのだろうか。ソロモン王、ダヴィデ王の時代に栄華を誇ったユダヤ人は、紀元前後にローマ帝国の支配を受けようになり、これに対する2度の大反乱（民衆戦争）を経てエルサレムを追放され、離散民（ディアスポラ）となったことは多くの

ランド国王には、当時は未発達であった商業（交易）や鉱工業をユダヤ人に任せる目論見があったとされる。なお、カジミェシュという地名も、1334年に「ユダヤ人の自由に関する一般憲章（カリシュの法令）」によって認められたユダヤ人の法的権利をポーランド全土に拡大したカジミェシュ大王の名にちなんだものである。ポーランド王国（ポーランド＝リトアニア共和国）は、近世にはオスマン帝国に次ぐ広大な面積を統治するヨーロッパの超大国へと成長する。ポーランド＝リトアニア共和国は東西キリスト教世界の境界に位置したことから、カトリックと正教をはじめ、プロテスタント諸教派やアルメニア使徒教会、イスラム教など、多民族・多宗教が共存する場となったが、特にユダヤ教徒は共和国人口の1割を占め、世界のユダヤ教徒の半数が共和国に居住する状況であった。それは、ポーランドが周辺の三大国に分割占領され、地図上からは姿を消す18世紀末まで続いた。

19世紀のヨーロッパはユダヤ人にとって、決して居心地の良い場所ではなかった。国民国家の勃興と、ナショナリズムの高揚の中で、ユダヤ人は次第にヨーロッパに居場所そのものを失っていった。プロイセン／ドイツによる占領地域では厳格な同化政策が敷かれ、ロシア帝国による占領地域では、ユダヤ人に不利な政策が繰り返し導入され、ユダヤ人側が反抗するとみれば苛烈な pogrom（暴力）が繰り返された。それには皇帝による扇動もあったとされている（野村真理、2016）。おびたしい人々が「自由の国」アメリカへの移住をめざし、またイスラエル建国を夢見てパレスチナに移住する（シオニスト運動）若者たちもこの時期に現れた。またその後、圧倒的多数のユダヤ人が居住するポーランドは、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害の主な舞台となった。戦間期のポーランドにおいてユダヤ教徒人口は300万であったが、1946年上半期にポーランド・ユダヤ人中央委員会に登録された人口は24万人である（Leszek Olejnik, 2003）。さらにこのわずかなユダヤ人コミュニティも、1967年の第三次中東戦争を受けてのポーランド・イスラエルの国交断絶と、それに伴うポーランドでのユダヤ人追放（公職追放とパスポートの付与）により、ほぼ完全に崩壊した。カジミェシュの町並みの荒廃は進み、筆者がクラクフに留学した2000年代前半においても、「貧民窟」であるとか、麻薬の売買などが行われていて治安が悪いため接近しないように筆者に忠告するポーランド人も多かった。実際には、多くの大学生が家賃の安いカジミェシュ地区のアパートに下宿していたし、シナゴグやユダヤ文化センター等では国際的に有名なユダヤ系の演奏家や学者によるコンサートや講演会が定期的に行われていた。そもそもクラクフの国立公文書館現代史分館はカジミェシュにあったので、筆者が接近しないわけにはいかなかった。ただし、当時は崩壊寸前の壁や板戸で釘付けされた老朽化した建物などを目にするのも少なくなく、事実無根の風評というよりは、タイムラグのある情報であったものと理解している。

2. 国際ツーリズムの文脈でのユダヤ文化の復元

さて、ではこの荒廃からの復興はどのように行われたのだろうか。そこには2つの転機があったと考えられる。

戦後のポーランドはソ連の影響圏に入ることを余儀なくされ、西側諸国の観光客が自由にポーランドを訪問できる状態ではなかった（ただし、ポーランドは他のソ連・東欧諸国に比べれば社会統制が比較的緩やかで、親戚訪問を理由とする国際移動を制限しない時期が長かった）。一般の観光客がポーランドを訪問できるようになったのは、1989年の「民主化」以降である。ユダヤ人については、1990年にポーランドとイスラエルの国交が回復して以来、アウシュヴィッツに代表される強制収容所の跡地を対象とした団体旅行（学生、兵士）が行われるようになり、また自らのルーツとしての「父祖の地」を訪ねるスタディ・ツアーが北米や欧州各地で企画されるようになった。クラクフはアウシュヴィッツまでバスで1時間半程度の場所に位置し、世界遺産の街として観光資源もあり、観光施設が整備されていることから、これら国際観光客のアウシュヴィッツへの中継地となった。アウシュヴィッツ収容所博物館の入館者については、1989年に70万人近くに上昇したのを除けば、1980年代、90年代を通じた年間入館者数は50万人台の年が多い。それよりも大きなインパクトとなったのは2004年のEU加盟に伴うシェンゲン協定署名（2004年、施行は2007年）である。2004年以降、年間入館者数は急激に上昇を続け、2007年には120万人に到達し、2016年には200万人台となった（アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所博物館発表）。

これに拍車をかけたのは1993～94年にかけて全世界で公開されたスティーブン・スピルバーグ監督の映画『シンドラーのリスト』である。カジミェシュやアウシュヴィッツ収容所付近でロケが行われたことから、カジミェシュのユダヤ文化はフィルム・ツーリズムの対象にもなっていった。このことは、カジミェシュについての理解にさまざまな誤認を生じさせることとなった。ロケ地と歴史上の出来事がおきた場所の齟齬などトリビアルなものは割愛し、カジミェシュの位置づけにかかわる重大なものを以下、指摘したい。

実は、歴史や現実の宗教分布に即して言えば、カジミェシュは「ユダヤ人街」ではないのである。図中の色が濃い大きな建造物はカトリック教会であり、6つの大きな教会が点在していることがわかる【図3】。ユダヤ教徒の住居が集中しているのは枠線の内側のみで、その他はキリスト教徒の住居であった。すなわち、カジミェシュがユダヤ人地区なのではなく、カジミェシュの内側にその面積の2割程度を占めるユダヤ人地区があったというのが正しい理解となる。カジミェシュは15世紀から第二次世界大戦までの長きにわたり、キリスト教徒とユダヤ教徒が共存してきた町だったの

である。

さらに言えば、カジミェシュのキリスト教徒地区にはスカウカと呼ばれるカトリックの巡礼地があり、王の暴政をいさめた司教の聖スタニスワフが残酷な方法で処刑された殉教地として知られている（スカウカの教会には、国民的な作家や作曲家などの棺を納めた墓所があり、昨今では聖スタニスワフから聖ヨハネ・パウロ2世まで、ポーランドの聖人のモニュメント

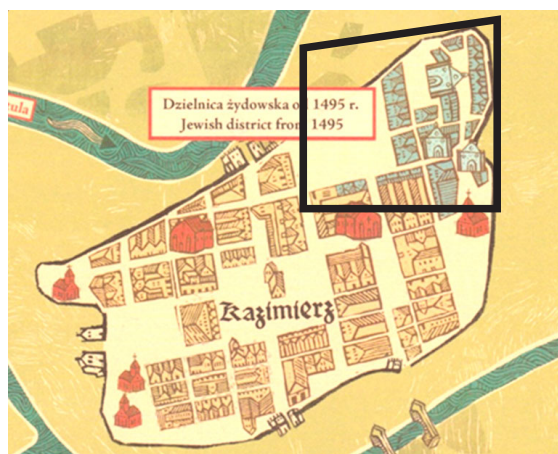


図3 カジミェシュの拡大図（図2より）

が林立する広場が作られるなど、愛国主義カトリックの聖地ともなっている）。しかし、ごくわずかのクラシック音楽ファンを除けば、この場所を積極的に訪れたいという国際ツーリストはいないだろう。ゴシック様式のひたすら巨大な教会堂は、特に芸術的な感興を催すものではなく、聖スタニスワフを称えるパレードなどは（正装の司教たちにスタニスワフの板絵を担いだ民族衣装の信徒が連なり、華やかで「フォトジェニック」ではあるかもしれないが）ポーランド史の文脈が強すぎて、国際ツーリストの興味をひくような物語を提示することはできない。

このような中で、知名度が極めて高い「アウシュヴィッツ」や『シンドラーのリスト』が国際ツーリストをカジミェシュに集客し、集客につながるユダヤ文化関連遺産が次々に復元され、さらに新たに博物館やギャラリー、土産物店、ユダヤ料理レストランも開設されている。これらが生み出す「エキゾチック」な文化景観が、ユダヤ文化やホロコーストについての強い関心を持たない観光客も集客し、「ユダヤ人街」をそこに実在させるという事態に至っているというのがここまでの話である。

3. ユダヤ文化関連遺産の復元

さて、当事者がほぼいなくなったポーランド社会において、ユダヤ人の歴史や記憶はどのように提示されているのだろうか。戦時中に多くの建造物、物品、史料が紛失・焼失した中で、何をどのように見せることができるのだろうか。ここでは、いくつかの類型を示したい。

* シナゴーグの復元と博物館化

比較的オーソドクスな手法として、戦中戦後に破壊されたり、倉庫等に転用された

りしたシナゴークを修復・復元し、ユダヤ博物館として公開する手法がある。廃屋同然となっていたのが1980年代の復元プロジェクトで壮麗な姿を取り戻したポーランド南東部の地方都市ワイントのシナゴークはつとに有名である。カジミェシュで1939年までユダヤ共同体の宗教、行政、文化の中心的機能を果たしていたスタラ・シナゴーク（15世紀創建）も、終戦直後には屋根も崩落して壁しか残っていなかったのが、1950年代に早々に再建され、クラクフ市歴史博物館の分館として公開された。外観や壁龕、中央部にあるビーマー（演壇）なども修復され、一部、復元される前の壁をみせる展示もある。トラーのほか、18世紀後半～19世紀初頭にポーランドや周辺国で製作された銀製の指示棒、燭台、食器、香炉、タペストリーなどの布製品がガラスのショーケースの中に展示されている。

カジミェシュではスタラ・シナゴークを含む7つのシナゴークが文化遺産として保存されている。観光客がよく訪れるのは、スタラ・シナゴークの傍らにあり墓地を有するレム・シナゴーク（16世紀創建）や、第二次世界大戦中、対岸のポドグジェ地区に建設された戦時ゲットーへの移動を強制され、カジミェシュのユダヤ共同体が破壊された歴史・経験について展示されているイザク・シナゴーク（17世紀創建）であるが、戦後の修復を経て青少年文化センターに転用され、現在では書店になっているボパー・シナゴーク（17世紀創建）や、よくコンサートが開かれる豪華絢爛な装飾のテンベル・シナゴーク（19世紀創建）は、地元住民やクラクフの学生・文化人になじみの場所となっている。

1990年代以降は、破壊されたシナゴークの跡地に、破壊された建造物の一部をそのまま展示したり（キューポラの骨組みだけを展示したビャウイストクの大シナゴーク跡）、解説パネルを設置したり（オシフィエンチムの大シナゴーク跡）など、建造物を復元しない（破壊の歴史を伝える）展示例も目立ってきている。

***ホロコーストに特化した博物館**

ポーランド各地に残る労働収容所や強制絶滅収容所の跡地などは、多くが博物館として保全・公開されている。終戦直後に国立博物館に指定されたアウシュヴィッツ＝ビルケナウやマイダネクなどの博物館が有名であるが、1990年以降にアメリカの財団等の支援を受け、急速に調査・整備が進められた東部の絶滅収容所（トレ布林カ、ベウジェツ、ソビブルなど）にも、イスラエルからの修学旅行生がバスを連ねて見学に訪れるようになっている。これらの博物館では「宗教文化」を伝える展示はごく小規模にとどまる。収容所に連行されたユダヤ人がトランクに入れていた、祝日を祝うための燭台や食器、布製品などが一部、展示されているのみである。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所博物館のザウナ館のように、遺品として残された戦前の家族写真などが展示され、在りし日のユダヤ共同体を偲ぶよすがとなっているものもある。

*ユダヤ文化センターとして

各地でシナゴークが復元されるのに伴い、ユダヤ文化センターが付設されるケースも増えてきている。学術講演やコンサート、子供向けや一般愛好者向けの文字、料理、造形・美術などのワークショップが行われ、モノの展示ではなく、体験（コト）や場を共有することによって記憶を喚起し、ネットワークを構築する試みであると言える。

カジミェシュのガリツィア博物館は、2004年に設立された新しい博物館である。写真家のクリス・シュヴァルツがイギリス人研究者の協力を得ながら、ガリツィア地方のユダヤ教関連遺産の「現在」の写真を撮影して回り、それを展示する場として開設された経緯から、英米の財団からの支援を得ており、多くの活動が英ポ二言語で行われている。また、その特性を活かして、外国からの学生インターンの受け入れや展示セットの海外への貸し出しにも熱心である。レンガがむき出しになった廃工場のような空間は最新のアート空間のようで、おしゃれなカフェや土産物も扱うミュージアムショップも併設されているが、ショップ（書籍部）の選書の水準は極めて高い。

2010年からは、カジミェシュで育ったポーランド人で、観光業に従事していた英語の堪能な若者たちのグループが博物館の運営を引き継ぎ、ヤクブ・ノヴァコフスキが館長に就任した。

* 2.5 次元の博物館（小説・映画を基に歴史を再構成して提示）

「2.5次元」とは、漫画、アニメやゲームを原作にした演劇、ミュージカルなどを指すスラングである。かつては宝塚歌劇団など、資本と固定ファン層を持つ劇団が中心に行っていた手法であるが、1990年代頃から新人アイドルグループの売り出し戦略として定着し、『セーラームーン』『プリキュア』『刀剣乱舞』など、ロングセラーになる作品も出てきている。さて、これを博物館に置き換えるとどうなるだろうか。

ここで取り上げたいのは、「オスカー・シンドラーの工場—エマリア」博物館である。シンドラーの工場は戦後、国庫に没収され、電信電話局として利用されていたが、2005年にクラクフ市に譲渡され、2007年から博物館として公開された。いわゆるよくある体験型博物館であるが、見学していると、自分がどこから（どのような視座から）展示を見ているのかわからなくなるような、主体のゆらぎを感じる。

展示はまず戦前のクラクフから始まる。当時のクラクフの町並みがスライドショーやアクリルパネルで再現され、路面電車に乗り込むと車窓から新聞売りの少年が微笑みかけてくる。これらの写真の取捨選択にも当然バイアスがあると考えられるが、これらの「史資料」に交じって、『シンドラーのリスト』で主人公が通っていた床屋や、ユダヤ人従業員が住んでいた部屋（台所）など、いわばロケセットが再現されている部屋もある。史資料と映画の世界観が入り混じる不思議な空間である。

ナチスの侵攻以降は、映画に依拠しつつ、鉤十字の旗やゲッターの壁、収容所のジ

オラマなど、アイコン的な展示を中心に、ポーランド人を含むクラクフの知識人の戦争体験を描いた他の映像作品（フィクション）の一場面や、子どもの玩具（人形）などを使った、もはや典拠がどこにあるのか不明な展示も増えてくる。もちろん、ユダヤ教の祝日に用いられた燭台、皿などの銀器など、オリジナルの品も展示されているが、基本的には、作品世界をいかに博物館の中に再現するかという点に終始しており、そういう意味で「2.5次元」作品の性質を強く持つ博物館であると言える。

展示の後半は、シンドラーの人物像やシンドラーに助けられたユダヤ人の語りにフォーカスした展示に移行し、シンドラーに関する証言映像が集められた映写室や、助かったユダヤ人らの名前やメッセージを刻んだオブジェのような展示も目立つようになる。

4. 見られることで見えなくなったもの／見られることで見えてきたもの

現代ポーランドにおけるユダヤ博物館の幾つかの展示パターンを見てきたが、カジミエシュに関しては、観光客に見られることで見えなくなったものは甚大である。

1つはキリスト教徒とユダヤ教徒のローカルな共存の歴史・記憶である。カジミエシュのポーランド人たちは、戦時に南に建設されたゲットーに連行されるユダヤ人たちを見ていた。それはオーラルヒストリーに基づき、ホロコーストの記憶を再構成している歴史学者のバルバラ・エンゲルキングらによって「傍観」と結論づけられ（エンゲルキング、2021）、自らの身を守るために、多くのポーランド人は、ユダヤ人に対して何もしなかったとされる。ただ、そこには「目撃者」となったポーランド人のトラウマがあり、沈黙（語りえぬ記憶）がある。共存の歴史の苦さを浮き彫りにする経験であると言える。

もう1つの見えなくなっているものは、ユダヤ人迫害をめぐる過酷な記憶やリアリティである。国際観光客の集客を前提として博物館が次々開館されたことで、これらの博物館は「観光施設」としての役割を果たすことが求められてきた。したがって、残虐な場面などの展示は忌避され、ノスタルジーや「寂寥美」を感じさせるような美的な表現が多くなっている。また、シンドラーに救われたユダヤ人の歴史は普遍的なユダヤ人の歴史と言えるかどうかという点でも疑問が残る。戦前のクラクフのユダヤ人は7万人であったが、ゲットーに「入ることができた（労働に適しているとみなされた）」ユダヤ人は1万5千人程度、シンドラーが救ったユダヤ人は1,200人である。したがって、シンドラーの救ったユダヤ人はゲットーを生き延びたユダヤ人の一類型を示したものとは言えるが、それが叶わなかったクラクフのユダヤ人はあまりにも多い。

さて、では観光を通じて可視化されたものは何だろうか。最もわかりやすい点とし

て、社会主義期に「貧民窟」などと称されていたカジミェシュ地区に外資が投下されることで、シナゴグの復元など、多くのユダヤ関連遺産が再建・建設されたことが挙げられる。ポール・コナトンはパフォーマンスを通じて記憶は保存されると述べたが（コナトン、2011）、毎年恒例のユダヤ文化フェスティバルや文化イベント、追悼式典【図4】や博物館などを訪れることによって、ホロコーストの歴史やユダヤの宗教文化に関心のある層がネットワーク化され、集団として可視化されることには大きな意味があると考えられる。これらの追悼式典に参加しているのはカトリックやユダヤ教の聖職者、大学生らしき若者などが多いが、男女を問わず壮年層、高齢層も観察できる。

もう1つはガリツィア博物館の例である。外国資本がトリガーとなった観光化から、地域の若者が経営に参入し、当初は英語ガイドとして、その後は学芸員、コミュニケーター、経営者として、博物館の運営を担っている状況がある。さらに、ガリツィア博物館の活動もそうであるように、カジミェシュはイスラエルや北米のユダヤ人を結びつけるグローバルなハブとなっていると言うこともできるだろう。「帰国」し、カジミェシュで起業する人も散見される。



図4 クラクフのゲッソーから収容所へユダヤ人が移送された日に行われる「記憶の行進」行事（筆者撮影、2016年）

見られることは、過去を想起する際には妨げとなることもないわけではないが、ポーランド人とユダヤ人が再び共にカジミェシュで新たな歴史を刻んでいく上では、大きな可能性を提供していると言えることができるだろう。

参考文献

- 須藤廣・遠藤英樹・山口誠・松本健太郎・神田孝治・高岡文章編著『観光が世界をつくる—メディア・身体・リアリティの観光社会学』明石書店、2023年
- 野村真理「ユダヤ人ネットワークの実像と虚像—「世界イスラエル連合」から『シオンの賢者の議定書』へ—」『東欧史研究』38号、2016年
- エンゲルキング、バルバラ（岩田美保訳）『「道義の問題が戸を叩く」—ユダヤ人大虐殺に対するポーランド人の姿勢』加藤有子『ホロコーストとヒロシマーポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』みすず書房、2021年
- コナトン、ポール（芦刈美紀子訳）『社会はいかに記憶するか—個人と社会の関係』新曜社、2011年

ブレブク、アニコー（寺尾信昭訳）『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』彩流社、2004 年
ポリアコフ、レオン（菅野賢治、合田正人訳）『反ユダヤ主義の歴史』全 5 巻、筑摩書房、2005 ～
2007 年
Olejniki, Leszek, *Polityka narodowościowa Polski w latach 1944-1960*. Wydawnictwo
Uniwersytetu Łódzkiego, 2003
Zubrzycki, Geneviève, *National Matters: Materiality, Culture, and Nationalism*, Stanford UP, 2017
Museum of the History of Polish Jews, *POLIN: 1000 Year History of Polish Jews*, 2014
Atlas Historii Żydów Polskich, Demart, 2009